
春の予感

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の予感

【Zコード】

N4467D

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

都内のマンションで同棲している僕と千絵は、休日を利用して県の山中にある滝を見に来ていた。二人で綺麗な水が流れ出る滝を眺めながら、ゆっくりと寛ぐ。僕たち一人は千絵が作ってくれていたサンドイッチ類を食べながら、暖かい風に吹かれ、春の訪れを感じるが……。

ザー……。

澄んだ滝の水が流れ落ちる音が絶えず聞こえてくる。ここはR県の山の中で、辺りには数軒の農家が密集していて、一際静かな場所だった。

僕と千絵はその日、滝を見に、わざわざ山の中まで来ていた。たくさんの鳥が飛び交い、普段住んでいる都會と違つて空気が美味しい。おまけに生暖かい風が吹いている。

三月とあつてか、厳しい冬の寒さはほんなくなり、過ごしやすい日が訪れていた。

「写真撮らない？滝をバックにして」

「いいね」

千絵の提案に僕が頷いた。

千絵はジーンズのポケットからカメラ付き携帯を取り出し、写真を撮り始める。カシヤリカシヤリという音が聞こえ、僕たちは一人して笑顔でツーショット写真に納まつた。

記念写真を撮り終わり、僕たちがゆっくりと滝を眺めていると、千絵が急に、

「お腹空いた」

と言つて、持つてきていた一人分の弁当をバッグから取り出した。サンドイッチ類を中心とした洋食の弁当で、おまけに熱々のホットコーヒーも淹れてある。

千絵が、

「食べようよ」

と言つと、僕が、

「ああ」

と頷き、中に入っていた卵サンドを手で掴んで、口に入れた。

僕と千絵は都内のマンションで同棲していた。普段は一人ともフ

ルタイムで仕事をしていく帰りが遅く、一緒にゆっくり出来るのは土日や祝日などの休日だけなのだ。

僕がサンドイッチ類を口に入れながら、

「もう春だね」

と言いつと、千絵が頷く。

実は僕と千絵は新年度が来たら正式に籍を入れると、それぞれの実家の両親に報告していた。それで一人とも気持ちが騒ぎ、早く四月が来ないかなと待ち続けているのだ。

食事が済み、僕たちは口臭予防のため、持ってきていたフルーツガムを噛み始めた。

「……」

二人とも無言のまま、ゆっくりと時間を潰す。

やがて風向きが北から南へと変わり、気温が上がり始めた。

僕が千絵に、

「キスしようか？」

と言いつと、千絵が頷く。

僕たちは噛み終わって味がなくなつたガムを吐き紙に吐き捨て、口の中の匂いが完全に取れたのを確認して、互いの体を寄せ合ひ、唇と唇を重ね合わせた。

しばらくの間、無我夢中でキスし、口の中にあつた潤いや愛おしい感覚を求め合う。

そしてキスが終わつた後、僕たちは並んで、再び滝を見始めた。一人で一緒に過ごす。幸い滝の前にいるのは自分たちだけなので、誰にも見られることはなかつた。

千絵が僕の肩に自分の頭を凭せ掛けると、僕が千絵の茶髪を撫でる。

不意に千絵が、

「あたしたち、ずっと一緒にいれるかな？」

と問うと、僕が、

「ああ。これが俺たちの愛の証だからな

と言つて、チエーンを付けて首から提げたペアリングを指差す。千絵はすでに左手の薬指に同じものを嵌めていた。もうすぐ結婚するので、前祝いみたいなものだ。

僕たちは派手に披露宴をやるつもりはなかつたし、親しい友人や知人たちだけにハガキで入籍を報せるだけで済ませようと思つていた。

それに新居を買う金もなかつたので、今まで通り、一人で同棲しているマンションで新婚生活を送るつもりでいた。

三月で生温い風なまめるが吹く。僕たちは滝の前で寛ぎながら、最高の休日を過ごしていた。

僕と千絵は体を持たせ合いながら、美しい水が絶えず放水される滝をじつと眺め続ける。

そして滝を眺めるのに飽きた僕が、

「もう春が来ちゃつたね」

と何気に一言言つと、千絵が頷き、僕の肩に凭せ掛けっていた頭を起こして、

「もう一回キスしよう

と言い出す。

僕が頷くと、千絵が僕の唇に自分のそれをそつと重ね合わせ、募る愛おしさを確かめる。

天気は快晴だった。雲が一つもなく、青空が広がつてゐる。

やがて昼間の時間が終わり、夕方になつた。

僕たちは滝の前でもう一度記念のキスをし、乗つてきていた車に戻つて滝を後にした。

助手席に千絵が座り、僕が運転席に座つてハンドルを握る。

車は都内にある二人の愛の巣へと戻つていった。

僕たち一人は疲れたからか、黙つたままじつと前を見据えている。冬場よりもだいぶ日が長くなつていたが、夕方になれば相変わらず暗い。

車は林道を走り抜けている。ライトを点けないと危なかつた。

僕は千絵が淹れてくれていたコーヒーの残りを飲みながら、運転に専念した。

その夜。

僕たちは無事自宅マンションへと帰り着き、すぐに一人一緒に風呂場へと入り、シャワーを出して、洗いっこをした。

一人で髪と体、それに顔を洗い、付いていたにおいや汚れを洗い落として、風呂から上がると、大きなバスタオルで体を拭き合う。その後、僕たちが缶ビールで乾杯し、酔つたついでにベッドで寝乱れ、濃密な夜を過ごしたのは言うまでもない。

ベッド上で愛し合う僕たち一人は、開けっ放しにした窓から入つてくる風の温かさから、紛れもなく春が訪れる予兆を感じ取つていた。

付けっぱなしにしていたテレビの天気予報では、これから先、暖かく春らしい陽気の日が続くと放送されていた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4467d/>

春の予感

2011年1月19日21時33分発行